

## バーチャルエクステンジプログラムの実践例と今後の可能性 Practical Examples for Virtual Exchange Program and Future Possibilities

シャープ昭子, カルガリー大学  
Akiko Sharp, University of Calgary

### 1. はじめに

新型コロナウイルスの拡大に伴い、対面での接触が大きく制限された。カルガリー大学は、コロナ禍で海外留学が不可能だった 2020 年秋学期から、**UGo Calgary** というスローガンを掲げて積極的にグループスタディプログラムをオンライン上で実践することを推奨し始めた。本学において、グループスタディプログラムは、「海外で一定期間過ごすことを前提に、ファカルティが独自にプログラムをデザインし、通常の授業とは別に学生の募集、必要であれば選抜を行い、2 週間から 4 週間の期間で本学の正規の単位取得させるプログラム」であり、協定校間で行われている「交換留学による単位取得」とは異なる位置付けになっている。

今回のバーチャルエクステンジは、2021 年、2022 年共に本学の日本語学習者と日本の英語学習者の組み合わせで実施された。参加者は、経験学習 (Experiential Learning) をベースに双方の学習者がお互いの学習言語 (日英) を使いながら協働作業を進め、その体験を記録し、振り返りを通じて改善点を自ら見出していった。さらに、協働作業による成果物を記録として残していくことをサイクルにしてプログラムはデザインされた。2021 年のプログラムには、15 名のカルガリー大学の学生が参加した。日本のパートナー大学からは 55 名の学生が複数のプロジェクトに欠席することなく参加してくれた。2022 年は、11 名のカルガリー大学の学生が参加し、複数の大学から合計 40 名の学生が参加してくれた。2 年分の合計の参加人数は、141 名に上る。

本稿の実践報告を参考に、海外とバーチャルで繋ぐプロジェクトを入れる語学教師が 1 人でも増えてくださることを願いたい。

#### 1.1 カルガリー大学日本語プログラムの概要

カルガリー大学は、創設 1964 年でアルバータ州のカルガリーにある総合大学である。学生数は 3 万 4000 人余りで、日本語プログラムは、2005 年に人文学部の言語・言語学・文化・文化学スクールに属する東アジア言語研究の一部としてスタートした。東アジア言語研究では学生は専門分野として中国語または日本語の選択ができる。日本語を主専攻とする学生数は、2022 年秋の記録では、82 名で、公用語であるフランス語専門の学生数を上回っている。

学生の日本語関係のクラブの活動も盛んで、コロナ前には JCC (Japanese Conversation Club) と JLC (Japanese Literature Club) が存在した。発表者は、2015 年の JLC の発足時から、クラブのアドバイザーとして関わりを持っている。JLC はロックダウンになった 2020 年春には、すぐにオンライン上での活動を開始し、100 名以上が即座に会員となり、ディスコードで定期的にイベントを開催していた。コロナ禍の合同活動の経験を経て、JCC と JLC の二つのクラブは、2020 年に

JCC (Japanese Culture Collectives)となり、日本語プログラムと協力関係を維持しながら、学生の自治組織として活発に活動を行っている。

## 1.2 グループスタディプログラム (GSP)

カルガリー大学の日本語グループスタディプログラムは 2005 年に始まった。それ以来、2019 年まで、2011 年の東日本大震災によりキャンセルを除いて、毎年 20 名の学生が、このプログラムを通じて日本へ短期留学してきた。発表者は、2015 年、2018 年、2019 年にそのグループスタディプログラムを実施した。そして 2023 年にはコロナ後始めて、20 名の学生とともに 4 週間を日本で過ごしてきた。

グループスタディ参加者は、専修大学の国際交流会館に滞在し、日本人の学生と部屋をシェアして 4 週間を過ごすことになっている。この間に、参加者は同大学の 4 週間の日本語コースを履修する。評価に関しては、専修大学の日本語コースの評価とカルガリー大学の担当教員から与えられる課題や会話テスト、作文テストなどの評価の総合成績が最終成績として記録に残る。学生は、このプログラムで、2つの日本語のクレジット (JPNS310 と JPNS312) を取得する。そのほかに、参加者は文化のコースとして JPNS309 を履修することが義務付けられている。4 週間でカルガリー大学のクレジットを 3 コース履修し、日本人と生活を共にして、日本の文化を生活を通じて体験できるというこのプログラムに参加するためには、学生は 8,000 ドル以上準備しなければならない。それにもかかわらず、毎年選抜が必要なほど応募者がいる。このプログラムは、コロナで渡航できないかもしれない可能性があったとしても、準備しなければならないほど、学生たちの間では定着していた。日本語のグループスタディプログラムは、本学では定員割れしたことのないプログラムとして知られており、日本語プログラムと共に成長してきた留学プログラムであることをここに特記しておきたい。

## 2. バーチャルエクステンジプログラム

### 2.1.1 バーチャルエクステンジプログラムの概要

バーチャルエクステンジは、カルガリー大学では、多くのファカルティメンバーにとって新しい試みであった。本学の国際部 (UCI: University of Calgary International) からの大学全体のファカルティメンバーに対するアプローチは 2020 年 9 月になると本格化し、準備のためのコースも設定され 35 名のファカルティが登録した。発表者はそのコースに参加し、仕事の合間にオンラインベースで学びを重ねた。13 に分かれたモジュールは充実したものであった。その中で、オンラインコミュニティの構築、コミュニティの捉え方、経験学習 (Experiential Learning)、COIL (Collaborative Online International Learning) などが心に留まり、バーチャル GSP に対するイメージが膨らんだ。カルガリー大学の国際部 (UCI) によるコースは、バーチャルエクステンジをやるという動機づけに大変役に立ち、そこで学んだことは私自身の語学教育に対する考え方を覆すほど、刺激的なものであった。

### 2.1.2 プログラムの内容

発表者はコロナの間もクラス以外で学生と接触する機会は比較的多くあった。そして、グループスタディで日本へ行けないからどうなるのかという不安の声は、あちこちから聞こえてきた。学生から聞かれた声をまとめるとこのようになる。

- グループスタディがないと計画通りに卒業できない。
- 日本へ行かないのだから、余計なお金は使いたくない（留学できる機会があれば留学するからお金は大事にしたい）。
- 日本語ができるようになりたい。日本人と話したい。
- オンラインで長い時間は疲れるから適当な時間がいい。
- 申し込みをする時には（実施前の2月）には詳細を知りたい。

これらは、教師側から見ると全く勝手な言い分であったが、事前調査で最低人数と言われていた12人程度は集まる可能性があり、日本側のパートナーも見つかったので、日本の学生とできる限り接触の機会を設定することを心に決めてデザインをした。

このプログラムで学生が履修するコースでは、既存の JPNS310 (Japanese Language and Culture in an Immersion Setting I) と JPNS312 (Japanese Language and Culture in an Immersion Setting II) という、留学を目的とする2つのコースに Virtual Learning というセクションを作って単位を出すことになっていた。これらのコースは、本学の日本語コースで2コース履修しているレベル (JPNS207) の日本語運用能力があれば履修できることになっていた。そして、日本語習得のレベルの上限設定が設定されていなかったために、クラスは初級後半から上級までの学生が1つのクラスに混在することになった。この時点で、日本語の語学習得を全面に掲げたコースデザインは不可能になった。様々な可能性を検討した末に、授業は同期のオンラインで、経験学習をベースにしたバーチャルエクステンジプログラムを実施するという事で覚悟を決めた。そして、オンライン上では、カナダの学生は日本語運用能力の向上、日本の学生は英語運用能力の向上を目的としたプログラムをデザインすることにした。学生に渡したプログラム説明の抜粋は以下の通りである。

“This program will provide students opportunities to further develop their Japanese language skills and to experience the culture through virtual materials while working with Japanese students, who will be using English for their language practice.

“This program also aims to develop participants’ target language proficiency and cultural competency via practical exercises/activities that foster language acquisition.

(Prepared in February 2021)

インフォメーションセッションでは、学生にコルブの経験学習モデルを示して、バーチャルエクステンジは、経験を通して日本語・日本文化を学んでいく

ことを強調した。①具体的な経験→②省察的観察→③抽象的概念化→④能動的実験という4つのプロセスの図を示し、学生には、従来の日本後クラスのように文法リストや語彙リストは配布されないことを強調し、使用言語はクラスではできるだけ日本語にするが、日本からの学生の目的は英語力の向上であるため、英語と日本語を使いながらプログラムを進めていくことになる」と説明した。

学生への経済的負担を最小限にするために、課題には無料の教材を使って取り組める作業を入れた。使用した教材は以下の通りである。

- JF(Japan Foundation)「いろどり」(2021年)
- JF「ひろがる」(2021年・2022年)
- JF みんなの教材サイト(2021年)
- NHK「Magical Japanese」(2022年)
- 「がんばってシャドーイング」(2022年)

教材のリンクは、クラスのインフォメーションと共にパドレットにリンクを掲載し、いつでもアクセスできるようにしておいた。文化に関するビデオなどは、10分程度のはクラスで一緒に視聴してから、新しい言葉などを解説していった。これは普通の授業では時間の制約でできないことなので、多くの学生が楽しい時間で学びも多かったとコメントしたのが印象的であった。

プログラムは、清泉女学院大学の学生と90分のバーチャルカンファレンスを3回計画した。カンファレンスの時間以外の授業では、クラスで時間を決めて音読の練習をしたり、グループごとに日本の学生向けのセッションの準備などで時間を使った。2022年のプログラムでは、国際協働オンライン学習—COIL

(Collaborative Online International Learning)を取り入れた。

### 2.1.3 スケジュールと参加人数

大学からは、コースは2コースで計画するように指定されたため、授業時間は80時間程度にする必要があった。オフラインでできる研究課題を多めにして、ズームの時間を少なくすることも考えたが、日本側で、バーチャルカンファレンス以外にも交流できる学生の確保ができる状況になってきたため、プログラム中は毎日5時間ズームで繋ぐことにした。2021年と2022年は、以下の日程でプログラムを実施した。

- 2021年 5月9日から28日(13日間)午後3時から午後8時、水曜日は、研究日としてクラスでズームでは繋がらない。
- 2022年 5月9日から27日(14日間)午後3時から午後8時。エクステンジのスケジュールの都合で研究日は設定せずに、学生の疲れ具合を見て休みを入れる。

2022年の日本の学生とのエクステンジのスケジュールは以下の通りである。

表1 2022年エクステンジスケジュール  
(MST=Mountain Standard Time カルガリー時間)  
(JST=日本時間)

回数	日程	時間	プログラム
1	Wednesday, May 11	18:00-19:30 (MST) 9:00-10:30 (JST)	COIL #1
2	Thursday, May 12	18:00-19:00 (MST) 9:00-10:00 (JST)	Virtual Conference #1
3	Monday, May 16	17:00-18:00 (MST) 9:00-10:00 (JST)	Reading Support #1
4	Tuesday, May 17	17:00-18:00 (MST) 9:00-10:00 (JST)	Reading Support #2
5	Thursday, May 19	18:00-19:30 (MST) 18:00-19:00 (MST)	Virtual Conference #2
6	Tuesday, May 24	17:00-18:00 (MST) 9:00-10:00 (JST)	Book Creator Collaboration
7	Wednesday, May 25	18:00-19:30 (MST) 9:00-10:30 (JST)	COIL #2
8	Thursday, May 26	18:00-19:30 (MST) 9:00-10:30 (JST)	Virtual Conference #3
9	Friday, May 20	18:00-19:00 (MST) 9:00-10:00 (JST)	Zoom event with students from Japan

#### Online Special Event

Friday, May 13: 17:00-18:00 Talk by Yang sensei (Japanese Classics)

#### 参加人数

バーチャルカンファレンス(Virtual Conference)は3回計画し、コアになる集まりを設定しておいた。このカンファレンスには、清泉女学院大学のカナダ研究のコースの履修者が参加した。日本からは、2021年は18名、2022年は11名、カルガリー大学からは、2021年は15名、2022年は11名が参加した。

バーチャルカンファレンスを含め、その他のズームの集まりへの日本からの参加人数は、2021年は清泉女学院大学から55名で、2022年は、清泉女学院大学、広島大学、甲南女子大学、専修大学の4つの大学から合計40名の学生が参加してくれた。カルガリー大学の学生は、長野、広島、神戸、東京という4つの異なる地域で大学生活を送る日本人の学生と交流することで、日本の中の各地の特色を知る機会を得ることになった。これは想定外の収穫と言えるであろう。

#### 2.2 実践例

短期間で2コース分の課題をこなすのは楽な作業であるはずがないが、学生によると、ブートキャンプ並みの苦しさだったそうである。2021年の1回目に課題の詳細がわからない時があったとのコメントがあり、2回目には課題の内容や役に立ちそうなフレーズのパワーポイントなどを準備して、1日に1時間程度は

こちらが一方向的に話すレクチャータイプの授業をした。これによって、学生の満足度も上がり、成果物は、1回目よりもまとまりのある作品が多くなった印象がある。発表者はいい作品は学生の許可を得て、例としてクラスで公開しており、このプログラムでも多くの例を提示した。回数を重ねるごとに、学生が作り出すものは内容が濃くなっていくのを見るのは興味深い。それと同時に、時には、全く新しい形で自分の作品を作る学生もおり、学生が持つ無限の創造性にこちらが驚くことも多かった。

字数制限の都合で、全ての実践例の詳細を紹介することができないので、一覧の中から3つほど選んだものについて、ここでは紹介しておきたい。以下は、2021年と2022年の課題の一覧である。

- a. カナダ・日本の文化紹介 (2021年・2022年 バーチャルカンファレンストピック)
- b. English Exchange Session Book (2022年)
- c. 「若返りの水」絵本の作成 (2021年)
- d. 「早口言葉」練習ブック (2021年)
- e. 個人研究・プレゼンテーション (2021年)
- f. バイリンガルブック (COIL)
  - o 私の故郷 (2022年)
  - o カルガリーの観光ガイドブック (2022年)
- g. 日本語の勉強記録：ポートフォリオ (2022年)
- h. 朗読「生きる」谷川俊太郎 練習記録 (2022年)

バーチャルカンファレンスは、エクスチェンジプログラムのメインとなるイベントである。1回目はプログラムの説明、自己紹介、ゲームでお互いのことを知る時間とした。2回目と3回目は、どちらかの大学が研究発表をして、質疑応答する時間を設けた。言語は、カナダの学生は日本語、日本の学生は英語を使うことを基本方針として決めたが、コミュニケーションに問題があれば、心地よい言葉を使うことを推奨して、意思疎通ができるような環境づくりを心がけた。2021年はライブで発表し質疑応答の時間を持った。2022年は録画を公開し、発表の日は、カナダと日本の学生がグループになり、録画の簡単な説明と質疑応答という形にした。30人規模の集まりであれば、録画を作成した方が、予期せぬ事態に対応しやすく、動画作成などの過程で学生の学びも多いのではないかというのが関わった教員の一致した意見であった。計画の段階から良い出会いがあり、日本側もカンファレンスを通常のクラスの中に組み込むことができたのは幸いであった。このカンファレンスの形は、継続して実施できる環境も整っているの、今後も実践を重ねていきたいと考えている。

2021年実施の、日本の学生への英語セッションでは、振り返りと内省をその日のうちに記録し、次の日に交流から得た学びを明確にしてからグループで反省点を出し合い、次のグループセッションの準備をした。このセッションは、学生たちに好評で、日本の学生からは、次回は自分達が計画して、カナダの学生に日

本語の勉強になるゲームなどをやりたいという声が多く聞かれた。カナダ側の学生からも、もっとやりたいという声が多く聞かれた。実施したのは2回であったが、学生によると、1回目は失敗、それを活かせたのが2回目だったそうで、2回では満足ができるセッションにはならなかったもので、これは3回に計画するべきであるとのことであった。学生中心に1時間余りの時間をZoomで仕切る形をとったプロジェクトであったが、学生の隠された力を垣間見ることになり、学生の満足度は高かった。これは、将来的にぜひ、もう一度やってみたい試みの一つである。

バイリンガルガイドブックのプロジェクトでは、日本の学生とペアになり、日本文化に関する研究をしたのちに、選んだトピックの紹介の本をバイリンガルで作成した。このプロジェクトでは、日本人の学生から、自分の文化を知るきっかけになったとコメントがあった。また、カナダ・ふるさと紹介の本の制作では、カナダ側の学生から、「自分はカナダ人になったが、カナダは異文化の国で、知らないことが多かった。このプロジェクトは、異文化理解につながったと思う」というコメントがあり、非常に興味深かった。

### 2.3 ツールと成果物

オンラインで使えるツールは多い(表2参照)。しかし、バーチャルエクステンジの場合には、特に、日本側とカナダ側の双方の教師と参加者が、心地よく使えるツールを選ぶことは想像以上に難しかった。カルガリー側の学生は、時間もたくさんあったので、新しいツールの使い方を練習する時間は十分に取れたが、日本側は、練習をする時間はほぼないので、カルガリーの学生との交流を通じて体得してもらいしかなかった。

Googleのファイル共有は慣れている学生も多く、問題はなかった。しかし、ビデオ作成やオンライン上でのeBookの制作は時間が必要で、時間がもっと欲しかったという振り返りのコメントがあった一方、説明をしなければいけなかったから、日本語を一生懸命使って、日本語を話す練習になったというコメントも多数あった。録画は、すぐにクラスで再生できるようにYouTubeにアップロードしたものを発表用のパドレットに提出させた。これによって、かなり時間の節約ができたと思う。毎日のシャドーイングの練習や、簡単な会話の記録には、オンライン上ですぐに録画再生できる、Vocarooをよく使った。学生が授業中に迷子になってしまわないように、授業中の練習時には、オンライン上の録音のリンクをGoogleシートに提出させて、継続した練習作業であることを可視化して、必ず全員が出して作業を終わりにすることを心がけた。パドレットは、スケジュール管理、バーチャルカンファレンス、COILなど、全てのファイルの共有に使った。BOOK CREATORは、活動記録や、昔話の再話、プロジェクトなどに使った。これは有料にすれば、オンラインでコラボレーションが可能なツールで、学生からは概ね好評である。しかし、漢字にふりがなをつけられない。その他にも多くの問題があるが、写真を入れながらページを増やしていく作業で日本語を自然に使う機会を持てるので、沈黙して作業に没頭しても雰囲気が悪くなることは

ないらしく、協働作業にはいいと思うというのが学生からのコメントに多くあった。

表2 オンラインツールの例 (左から)

パドレット、Vocaroo、BOOK CREATOR Library, BOOK CREATOR で制作した本



## 2.4 評価について

アウトラインで学生に提示した評価基準は表3を参照していただきたい。評価に関しては、「語学のクラスではあるが、正確性よりも質問に対する答えに対して、いかに深く考えて、自分の意見を入れていくかということの評価する」と最初に伝えた。ルーブリックや評価基準のメモも早めに提示しておいた。評価全体の中で、正確性は10-15%にした。作品は創造性、構成、内容の評価し、発表は、発表時の態度などを重要視した別のルーブリックで評価した。振り返りは、参加者が最後に履修した日本語のクラスのレベルごとに最低字数を提示し、字数、書かれた文章の内容を考慮して評価した。学生には、新しい試みのプログラムで学んだこと、これからもっと増えるであろうオンライン上での仕事の練習になること、そして何よりも、コロナによって経験することになったバーチャルエクスチェンジという新しい体験を人に語れる人になりなさいと何度も話した。成績が高くつきすぎてしまうのが心配であったが、課題の多さに負けて、途中で投げ出したり、提出を諦めてしまう学生もおり、思ったよりも平均が高くなかったのが意外であった。

表3 評価基準 (2022年)

<p><b>JPNS 310: Topics in Japanese Language in an Immersion Setting (Virtual Learning I)</b></p> <ul style="list-style-type: none"> <li>● <b>Projects 50%</b> <ul style="list-style-type: none"> <li>Project #1 Recording 生きる 15% (Letter Grade)</li> <li>○ Project #2 VE Conference Presentation Recording " My life in Calgary" Presentation 20%</li> <li>○ Project #3 (Guidebook 15%)</li> </ul> </li> <li>● <b>Oral Test 15%</b></li> <li>● <b>Reflection 25%</b></li> </ul>	<p><b>JPNS 312: Topics in Japanese Language in an Immersion Setting (Virtual Learning II)</b></p> <ul style="list-style-type: none"> <li>● <b>COIL (Topic Book and Report) 30%</b></li> <li>● <b>Learning record (Portfolio) 30%</b></li> <li>● <b>Assignments 30% (1% each, Pass/Fail) (D2L)</b></li> <li>● <b>Participation (including Shadowing #6 - 9) 10%</b></li> </ul>
--	---



<ul style="list-style-type: none"> <li>○ Daily reflection 15% Pass/Fail (D2L)</li> <li>○ Final reflection 10%</li> <li>● Participation 10% (including Shadowing #1 -#5 submission 5%)</li> </ul>	
--	--

出席率であるが、2021年は、インフォメーションセッションに参加しなかった学生が独自に休みや遅刻を繰り返したが、それ以外の学生は授業中はズームをつなげたまま、無遅刻、無欠席、無早退で終了した。2022年は全員でつながりなしの14日を過ごした。休憩時間後、授業開始の合図をするとさっと顔を出してサインを送り合うのが、いつの間にか恒例になった。そして、日本の学生が来るときには、申し合わせたように全員が顔を出していて、積極的に授業に参加する姿には感心するよりも感動した。

### 3. 今後の可能性

閉ざされた世界で始まったオンラインの授業であったが、それはグループスタディにおいてはバーチャルエクステンジという新たなプログラムを誕生させ、それは学生に新たな学びと出会いをもたらしたと言える。経験学習をベースにしたプロジェクト型のプログラムであることを強調すれば、言語運用能力に差があるクラスでもバーチャルエクステンジプログラムは成り立つと考えられる。今回は、およそ2週間で2コースを展開することになったが、もっと短期にして、1コースにすれば、学生と教師の双方の負担がもう少し軽いコースが考えられるであろう。

留学が可能になった今、バーチャルエクステンジを語る人は少なくなってしまった印象がある。しかし、バーチャルエクステンジは、諸般の事情で留学が叶わない学生に海外との接触をもたらし、それは、彼らにも留学経験者が現地で体験する、言葉が通じたという喜び、言いたいことが言葉にならない悔しさを体験することを可能にしてくれる。このような機会は今後も継続していくべきであろう。

最後に、学生からのコメントを紹介したい。

- This program was incredibly fun. I had so much fun talking to native Japanese students, and I thoroughly enjoyed every moment of the course. I've been a university student for a while, and I don't usually feel sad at the end of the course, especially if it's as stressful as this one, but after the last exchange I genuinely felt sad that it was over. I could feel that with every exchange session, my Japanese was improving even if it was just a little bit. I also gained plenty of confidence in speaking Japanese due to this program, something I was severely lacking before. I would like to talk with Japanese students more. I haven't spoken to Japanese students before at all, and I haven't spoken Japanese to anyone aside from my friends, classmates, and my teacher. But, during this course I would often have to speak Japanese, which really helped me gain confidence and improved my Japanese.

- It was structured really differently from any other Japanese classes I've taken up to this point and it was a really interactive class. I think I learned so much.
- I don't like public presentations, and I'm really bad at them, I don't like starting conversations and I often feel awkward. I would usually try to stay in the background and try to go unnoticed in classes. I think this class really helped me to overcome that by having to start conversations with Japanese students and help keep the conversations going.

## 謝辞

バーチャルエクスチェンジプログラムという新たな試みに対し、清泉女学院大学の富永裕子教授とバーチ・グレッグ教授がすぐに協力を約束してくださいました。お二人のご協力がなければ、このプログラムは実現しませんでした。本当にありがとうございました。また、日本からは清泉女学院大学、広島大学、甲南女子大学、専修大学から多くの学生にZoomのクラスに参加していただきました。ありがとうございました。そして、新しいプログラムに参加してくれた、カルガリー大学の26名の学生達の勇気に拍手を贈ります。みなさんとは、心に残るとても貴重な時間を共有できたことを嬉しく思います。また、参加学生達は、彼らの日々の振り返りや成果物をカンファレンスの場などで公開することに快く賛同してくれました。みなさん、どうもありがとうございます。

最後に、カルガリー大学の楊暁捷教授（楊先生）には、この新しい試みの実施にあたり、多大なる励ましとアドバイスをいただきました。さらに、2022年5月には、ご療養中にもかかわらず、バーチャルエクスチェンジプログラムの古典の講義として、日本の絵巻についてのご講義をご快諾いただき、日本からも参加者をお招きしてとても活発な議論をすることができました。楊先生は、カルガリー大学日本語プログラム・グループスタディプログラムの生みの親であり、学生の海外経験をいつも推奨していらっしゃいました。かつてCAJLEの理事もされており、ご存知の方も多いと思います。楊先生は、常にカナダにおける日本語と日本文化の普及にご尽力されてきましたが、残念ながら、2022年10月13日にご逝去されました。この場を借りて、これまでのご貢献と数えきれないほどのアドバイスに感謝し、心からご冥福をお祈りいたします。

## 参考文献

- Kolb, D. A. (1984). *Experiential Learning: Experience as the source of learning and development*. (Vol.1). Englewood Cliffs, NJ: Prentice-Hall.
- BOOK CREATOR. Retrieved August 25, 2023. <https://read.bookcreator.com/>
- Padlet. Retrieved on August 25, 2023. <https://padlet.com/>
- Vocaroo. Retrieved on August 25, 2023. <https://vocaroo.com/>